

れた著者は、其後更に關係遺品の檢出と調査とに精進して、それ等の上に立つて我が佛其中特色の豊かな梵鐘の諸性質を闡明したのが本書である。卷頭の概説は此の研究の結果を平明に説いたもので、充つ梵鐘各部の名稱から、現存品の分布を觀、以下鐘の口徑・高さ・撞座・乳・葩頭・笠・上下帶の裝飾等各部の形式學的考察を載せ、また銘文の時代順に依る觀察から、其の體裁、内容の變遷を説き、結論としては等の推移上に示現せられた時代相を論じて居る。後半は右の所論の基礎となつた慶長末年以前の遺品の年表であつて、載する所文武二年の大和妙心寺鐘以下の有銘鐘三百八十口(外に卷末追加二口)同じ時代と認むべき無銘鐘三十二口の多數に上り、單に年代順の綿密な表の外に要目一覽表、同分布表などを添へ、最後に三種の索引を附して、資料利用者の便に備へると云ふ極めて念入りのものである。

本書を読んで氣附くのは著者が研究の確實を期する爲に遺品の調査檢出に多大の苦心と努力とを拂ふたことである。これは其の過半を占めるあまり見榮のしない表の上によく表はれてゐる。氏の梵鐘觀はか様に基礎を固めた後で、それから歸納すると云ふ方法が取られてゐる爲に、所論も無理がなく、加ふるに資料が殆んど全部年代の明なものである點で、遺品の各部の形式觀から引いて年代に依る梵鐘の變遷論の如き、考古學上一つの標式的な好例とさへ見られる手堅さを示してゐる。此の點で著者の資料蒐集に拂はれた苦心は充分に酬はれたと云ふ可きである。たゞ此の現在資料に重きを置くと云ふ立場から、時代に依つて鐘の遺存する

條件が必ずしも同一でないこと、例へば時代の廻る程實際鑄られた鐘が失はれる見易い事實が、論述の間に閑却されて、現存數をば直ちにその時代に作られし數と見なして時代の文化論が試みられたのは一考を要する部分ではなからうか。なほ此の書が實質に於いて、梵鐘研究の現在の水準を示し、そこに資料が集大成せられてゐるのを見るにつけ、著者にとつて左程困難でなかつた筈の從來の關係文獻目錄の缺けてゐることも評者には一つの瑕瑾に見える。それは兎も角として、大阪鐵工所と云ふ様な別個の職務に與つてゐる著者に依つて、この如き基礎的な業績の擧げられたのは特筆せらるべきであり、また近年膨大な出版物の間に、本書の如き勞作が、四六倍判假綴二百頁以内と云ふ手に入り易い形で公にされたのもゆかしい事である。(大阪市阿倍野筋三丁目東京考古學會發賣、定價參閱)(梅原末治)

靜岡縣 磐田郡 松林山古墳發掘調査報告

後藤 守一
内藤 政光 共著
高橋 勇

本書は東京帝室博物館に夫々職を奉ぜられる後藤・内藤・高橋の三氏が、靜岡縣磐田原古墳群の一中心をなす松林山古墳(前方後圓墳)を發掘調査された報告書である。前後九日に渉る實際の發掘に與つたのは内藤・高橋の兩氏で遺物の整理の多くもまた其の手に成つたのであるが、是等が後藤氏の手で更に整理の上、そ

の考察を加へたのが本報告である點から後藤氏の業績として注意するべきものであらう。

さて本書は序にも見ゆる如く、昭和五年皇上陛下が靜岡縣へ御臨幸遊ばされ、御用邸に御駐泊の御祠、磐田郡出土の四神四獸鏡が乙夜の覽に供せられた光榮に感激した當時の縣史編輯主事足立鐵太郎氏が郷土文化顯揚の意氣にもえて同じ地域にある松林山古墳の科學的發掘を志し、後藤守一氏を囑して遂行した由來をもつもので昭和六年九月に行はれた發掘の結果が以後八年目の今日漸く結實を見たのである。多くの報告書と同様本書も 一、前言 二、發掘調査の經過 三、古墳の位置 四、外形 五、内部構造 六、石室内の遺物 七、結語の順序で記述されてゐる。遠江國には東は大井川に限られる牧ノ原から西は濱名湖畔に展開する三方原に至る間幾つかの洪積台地が南北に走る構造線に沿うて流れる大小の河川にその側縁を浸蝕されて、南の沖積低地にまでその端部を延ばしてゐる。その中央にあるのが磐田原であり、後に國分寺の設立を見た地域である。この地域の中核をなす本古墳は墳丘の總長一六・四米、後圓部直徑六五米、高さ二一・八米を數へる大規模のもので、嘗て周濠をも存してゐた様である。其の外部の設備として葦石が後圓部斜面に残存し埴輪則簡も原位置に存するものが一個あつて著者に依り環形の圍繞が想像されてゐる。内部の構造主體はこの後圓部に南北に設けられた堅穴式石室で其の狭長な點が注意せられ、これ等から本前方後圓墳が所謂古式古墳の範圍に入る事が認められる。扱て石室は全長七・九米の中央でや

や繼れたもので著者はこの部分で室を前後に區別した。板狀石で作られた此の堅穴式石室は良好な保存狀態を示し、周圍特に側壁を粘土で覆ひ雨水の流入を防ぐ設備が明瞭に認められた。うちに存した遺物またよく原形を存してゐた。いまその一斑を紹介すると後室(北側)からは貝製鏝、鏡、太刀、玉類を發見した。これらと共に著者は一部木片の形迹のあつた點から木棺の存在を考へたが金屬製釘の發見されぬ事に疑問をのこしてゐる。同様の鏡は二神二獸鏡と大形の内行花文鏡、四獸鏡である。鏡は前室でも内行花文鏡一面發見された。是等のうち二神二獸鏡は神像の鮮鋭なものであり「王父」「王母」の銘を存し、立派な舶載鏡で後漢末三國代に比定されるものである。碧玉製管玉が五十個一塊をなして存した事は珍しくもないが、それと共に所謂琴柱形石製品が出土した事を著者は注意してゐる。前室は主として武器關係の遺物が置かれてゐた様でその他に日常具、斧頭、鎌身等も出土し、更に所謂巴形銅器も三箇あつた。その出土の位置からこの遺物の用途に就いて一説を提出してゐる。是等の遺物に關する一々の記述の後に著者はこの古式古墳が磐田原古墳群中異彩を放つ所以を説き、一方古史を引用し遠江國の國造古據地をこの地方に求め、之を國造の墓とすることは郷土史家でない著者の立場としては出來ないが少くも國造の墓を作らしめる史的背景をこの地の古墳群の實際が考へられるとして本報告の結びとしてゐる。

先づ本報告書の對象となつた所謂古式古墳に就いては近年その發掘例を加へ、その内部構造が明かにされて來た。かの山城乙訓

の長法寺古墳、近江安土瓢箪山古墳の如き何れもその代表的なものと云ふべく、それらに狭長な竪穴式石室の實際の姿が見られる。今この範圍に入るべきものが遠江國で新たに調査された事は注意さるべきである。たゞ此の種石室の實際を見る機會にめぐまれた評者はこの石室の記述にあたつて、これ等從來のものの考慮が殆んどなされず、細長い室の縦れに依り前後兩室を區分してその意味を考へんとせられし事や、又棺の有無に就いて釘の存在を問題とせられてゐる事を寧ろ不思議に思ふものである。石室の實測圖を缺いてゐる爲に早急な判斷は固より出来ないが、別に收められた寫眞からすると、石室の中央部に於ける縦れは土壁に依る後の變形とも見られるふしが多い。また古式古墳の棺とはそれ自身割竹形乃至刳舟狀の細長いものが多い點から釘の存否などは此の場合多く考慮する要はないのではなからうか。かやうな一二の點があるとしても本書が忠實に事實を録した上、更にこれを四隣の遺跡と併せみて、著者がその結語に考古學的遺物を何らかの古代文化の全體的空間、時間に占める位置を明かにしようとしてゐる態度は吾々に教へる所が多い。この古墳の屬する磐田原古墳群が語る古代文化育成の經過を地域考古學の課題として著者が更に詳しい考察を遂げられることを信じて且つ期待するものである。

およそ報告書は有りの儘の姿を實物自體に即して記述する事がその主目的である。これこそ考古學者の先づ務むべき任務であるが、その仕事は地味であり、而も勞苦が多い。古墳關係に於いて二十年の長きに亙りこの地味な仕事をつゞけられてゐる著者の態

京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第十九冊

京都府に於ける史蹟調査——殊にその考古學的方面に於ては梅原委員の熱心な探查に依り近年愈々學術上の興味を加へ、新資料、新事實の學界に對する提供は、蓋し大なるものがあるが、今回其の執筆に係る報告書第十九冊は、世人の耳にもなほ新たる北白川高麗兩廢寺址發掘の結果を録してゐて、わが上代寺院址の研究に與ふる所の新知見は、單なる調査事業としての立場に止まらず、廣く諸方面から注目を受くべき業績が盛られたものである。

さて二つの調査は等しく寺址に關するものであるけれど、その結果からして、北白川の方は出土品に重點が置かれ、高麗寺のそれは、遺構に最も興味が集中されて發掘後の收獲に於ける二つの異つた場合を代表したと見られる。前者の遺蹟は昭和九年秋、京都市北白川別當町から同じく上終町に通ずる市の土地區劃整理土工事中、偶然知られたもの、確實な堂宇址の遺構はたゞ一つであつて、これは二段の石築基礎の上に平瓦を積み重ねて作つてあり、東西にながく、東から西に向つて緩慢なる斜傾をなせる臺地上に營まれたから、勢ひ、西側の瓦積が高く、且つ上半瓦積を二重にして崩壞に備へた構造である。石階は南北兩側の中央にあつて北側が割合によく遺つてゐた。この南面の堂宇の遺構の上には礎石など全く確められなかつたが、別にこれから約一町近く離れた